シンポジウム特集記事 総説

ヨーロッパ人類学会

佐 竹 隆*

日本大学松戸歯学部解剖人類形態学

(平成19年12月20日受付, 平成20年5月2日受理)

要 約

ヨーロッパ人類学会(EAA)は1976年に創設された。その目的は、互いに情報や意見の交換を行いヨーロッパ諸国の人類学研究や人類学教育を推進していくことである。会員数は現在、主にヨーロッパ諸国30ヶ国以上からの500余名である。ニュース・レターが年2〜3回配布され、また、二年に一度書籍が出版されている。学術大会は二年に一度ヨーロッパの各地で開催され、200余名の参加がある。大学院生を対象に人類学に関する講習会が2007年開催された。学会費は各国の経済状態により異なる。

キーワード: ヨーロッパ人類学会, 学術大会, ニュース・レター, 書籍, 講習会, 発育学

The European Anthropological Association (EAA)

Takashi Satake*

Nihon University School of Dentistry at Matsudo

(Received 20 December 2007; accepted 2 May 2008)

Abstract

The European Anthropological Association (EAA) was created in 1976. It is a scientific organization, which aims to promote research and teaching in anthropology in the different European countries and to promote exchanges of information, workshops, scientific congresses, and schools at the post graduate level. It attempts to bring together and generate synergy among people, institutions and organizations, which have shared interests in education in Anthropology. The EAA has more than 500 regular members from about 30 European and several non-European countries. A newsletter is distributed among all members two or three times a year. The EAA has also published a Biennial Book series since 1998. A congress of the EAA is arranged every two years in a different European host city. The first Intensive Course in Biological Anthropology Summer School was held at Charles University in Prague last summer. The EAA membership fee for regular member is not fixed; rather the fee has three levels based on the economic status of individual countries.

Key words: The European Anthropological Association (EAA), Congress of the EAA, Newsletter, Biennial Books of EAA, Seminar, Auxology

*日本大学松戸歯学部解剖人類形態学
〒271-8587 千葉県松戸市栄町西2-870-1
E-mail: satake.takashi@nihon-u.ac.jp
©2008 The Anthropological Society of Nippon

はじめに

京都で必ず立ち寄る所がある。南禅寺の近くにある京都市国際交流会館である。ヨーロッパに詳しい碩学のコーナーがあるからである。しかし、筆者は人類学がヨーロッパの長い歴史のなかでどのような位置を占めてきたのか、全くといっていいほど知識がない。ヨーロッパの東西問題や多くの国から構成される欧州連合を考えるだけでも、ヨーロッパ人類学会（The European Anthropological Association: EAA）には、何かにつけ国籍による微かな多くの問題がありそうなことは推察できる。

筆者はヨーロッパに住んだことも留学したこともない。アメリカの Human Biology Association とイギリスの Society for the Study of Human Biology には所属しているが、Human Biology Association や American Association of Physical Anthropologists の Congress には一度、Society for the study of Human biology の Congress には参加したことがない。そういった経験で EAA を紹介する資格があるのか疑問ではあるが、Congress of the EAA に何度か参加した経験から等身大の EAA の紹介を試みたい。したがって不明確な箇所も多々あることが予想される。より客観的な EAA の情報を得たい方は website (<http://eaa.elite.hu/>) を訪ねていただき、小論と合わせて考えていただくとより具体的なイメージが得られるであろう。ともかく、EAA について何らかの情報が提供できれば幸いである。

ヨーロッパ人類学会（EAA）の活動

The European Anthropological Association (EAA) の設立の目的は、ヨーロッパ諸国の人類学の研究や教育情報を交換したり、支援したりすることである。具体的には、Newsletter（ニュース・レター）や Biennial Books of EAA（書籍）の発行（EAA の編集する雑誌は無いようである）とセミナー、学術大会の開催などが主なものである。規模などは全く違うが、EAA はある意味でヨーロッパの AAPA のようなものであると考える人もいるようである。

会員について

会員の構成について Dr. Hauspie, R. (Free University of Brussels) に伺ったところ、2006 年度の会員数は表 1 に示すとおりである。40 以上もの多くの国からの会員で構成されている。ロシアの 125 人を最高に、イタリア（59 人）、クロアチア（34 人）、フランス、スペイン（33 人）、ドイツ（26 人）の順で、学会員の総数は 514 名である。学会費は各会員の国の経済状況により変わるが、一般

Table 1 Number of the membership in the European Anthropological Association by country

Country	Number of the membership
ALBANIA	2
AZERBAIJAN	1
BELGIUM	12
BULGARIA	31
BYELARUS	8
CANADA	2
CHINA	1
COLOMBIA	1
CROATIA	34
CZECH REPUBLIC	4
DENMARK	8
ESTONIA	6
FRANCE	33
GEORGIA	1
GERMANY	26
GREAT BRITAIN	5
GREECE	6
HUNGARY	30
INDIA	8
ISRAEL	2
ITALY	59
JAPAN	3
LATVIA	1
LITHUANIA	2
MACEDONIA	2
MEXICO	4
MOLDOVA	1
NIGERIA	1
NORWAY	1
PERU	2
POLAND	24
PORTUGAL	4
RUSSIA	125
SLOVAK REPUBLIC	10
SLOVENIA	2
SOUTH AFRICA	1
SPAIN	33
SWEDEN	4
SWITZERLAND	2
THE NETHERLANDS	2
TURKEY	3
U.S.A.	2
UKRAINE	3
VENEZUELA	1
ZAMBIA	1
Total	514

的には年間 22 ユーロである。2007 年度からこれらの担当が Dr. Hauspie から Dr. Zsakai, A. (Eötvös Loránd University) に変わり、10 月から website の内容も新しくなることであったが、現在のところまだ変更されていない。改訂が行われれば、新しい情報が得られるであろう。会員の学問領域は、日本語に訳すのは難しいので

欧名のまま示す。Human Evolution, Human Population Genetics, Growth and Development, Applied Anthropology, Paleo-anthropology, Bio-demography, Paleo-Pathology, Human Ecology, Functional Anthropology, Biocultural Researches などである。

ニュース・レター

A4版の30ページ位の分量の情報誌で年に2～3回送られてくる。内容の目次は、例えば、Agenda, EAA News, Congresses, Reports, Announcements, New from the Presses, Contents of Journals, Local Treasurers といったものである。協議事項、他の学術大会の開催予定、新刊本紹介、新着関係学術誌の紹介（雑誌名、著者、タイトル、刊、号など）、学会員の消息などといったところである。

書籍の出版

Biennial Books of EAA は査読を経た投稿原稿をもとに（依頼原稿もあると思う）二年おきに出版されてきた。これまでに次のものが出版された。Vol. 0（1998）Secular Growth Changes in Europe, Vol. 1（2000）Human Population Genetics in Europe, Vol. 2（2002）Ecological Aspects of Past Human Settlers in Europe. Vol. 3（2004）Physique and Body Composition, Vol. 4（2006）Human Evolution: Facts and Factors. である。次号は2008年出版の予定である。

講習会

EAA 会長の Dr. Susanne, C. (Free University of Brussels) から、大学院生を対象にした初めての試みである講習会の予報がメールで送られてきた（2006年12月）。タイトルは Intensive Course In Biological Anthropology Summer

School で、主催者は The Charles University in Prague と EAA である。会期は2007年7月16日から30日までの二週間。これは学術大会や研究活動ではなく一般的な教育活動で、大学院生（修士課程、博士課程の学生）を対象にしたもので、試験も行われ単位が与えられる。その内容は一般の人類学、人類進化や人類遺伝に関する授業と実習で、教本として、“Essentials of Biological Anthropology” (Charles University Press) が配布される。学生の選抜は、講習会参加希望の動機、履歴書、指導教官の推薦状などによって選考される。参加費は300ユーロで、支払いの困難な学生は事前に申し出ると EAA から援助が期待できる。

ヨーロッパ人類学会学術大会

Congress of the EAA は二年に一度ヨーロッパで開催される。学会開催地と大会長を表2に示す。そもそも筆者がヨーロッパの学会に出かけたのは、1988年東郷正美先生（東京大学）に、イギリスでの 5th International Congress of Auxology とその直後 Zagreb で開催される 12th International Congress of Anthropological Ethnological Sciences に参加するよう誘っていただき、おとした時にはじまる。International Congress of Auxology は基本的には三年に一度開催される。ちなみに、初めて参加した1988年はイギリスの Exeter, 順に1991年スペインの Madrid, 1994年ハンガリーの Szombathely, 1997年アメリカの Philadelphia, 2000年イタリアの Turin, 2003年イタリアの Firenze と続き、今年（2007年）日本で念願の 11th International Congress of Auxology が芦澤玖美先生（大妻女子大学）を会長に田中敏章先生（国立成育医療センター）を事務局長として開催された。この Congress には

Table 2 Congress of the European Anthropological Association

Year	Place	Country	President
1977	Zagreb	Croatia	Maver, H. and Rudan, P.
1980	Brno	Czech Republic	Jelinek, J.
1982	Petralona	Greece	Poulianos, A.
1984	Florence	Italy	Chiarelli, B.
1986	Lisbonne	Portugal	Castgro e Almeida, M.E.
1988	Budapest	Hungary	Eiben, O.G.
1990	Wroclaw	Poland	Bielicki, T. and Hulanicka, B.
1992	Madrid	Spain	Gerralda, M.-D.
1994	Copenhagen	Denmark	Bennike, P.
1996	Brussels	Belgium	Susanne, C. and Hauspie, R.
1998	Jena	Germany	Jaeger, U.
2000	Cambridge	Great Britain	Mascie-Taylor, C.G.N.
2002	Zagreb	Croatia	Rudan, P.
2004	Komotini	Greece	Xilotiris, N.
2006	Budapest	Hungary	Bodzsar, E.G.

第5回以降、第6回の誌上発表を除き参加することができた。このように海外での学会活動はこの Congress を基軸に予定を立てている。そして、この Congress と同時期にヨーロッパで開催される興味ある Congress があれば参加するよう心掛けてきた。2000年の9th International Congress of Auxology 直後、12th Congress of the EAA が Cambridge で開催されたので参加することができた。

10th Congress of the EAA (Brussels, Belgium)

初めて Congress of the EAA に参加したのは、1996年ベルギーでの Congress で、この時はアメリカのいくつかの大学と研究所 (Wright State University (旧 Fels Research Institute), University of Arizona, Michigan State University, Michigan University, Ohio State University, National Institute of Health) を服部恒明先生 (茨城大学), 田中茂穂先生 (国立健康栄養研究所) らとともに訪問し、研究施設の見学や研究者との意見交換を行った後、単身 Congress に参加した。また Congress と同時期に、オランダで Dr. Kemper, H. (Vrije Universiteit van Amsterdam) による Longitudinal Study のセミナーが、Dr. Roche, A. (Write State University), Dr. Malina, R.M. (University of Texas) らを招き開催されることになっていたが、日程の調整がつかず参加することは断念した。また、筆者はその当時身体組成 (Body Composition) の研究に関心があり、中でも Dr. Clarys, J.P. (Vrije Universiteit Brussel) の研究に興味をもっていたので、同じ Brussels なので訪問する予定を立てた。予約を入れておいたが、生憎 Dr. Clarys は出張で不在だった。予め Dr. Clarys から Dr. Van Roy, P. に研究施設を案内するよう伝えてあったので、Dr. Van Roy に案内していただいた。身体組成の研究は、そのほとんどが非観血的な方法であるが、Dr. Clarys は解剖学的に、例えば、筋重量、脂肪重量などを剖出定量していた。そういった研究は我が国でもほとんどないので筆者も同じようなことを試みていたので、ぜひとも実験施設が見たかった。Congress の会場で Dr. Clarys の研究室にどのように行けばよいのか尋ねた人が大会長の一人である Dr. Susanne で、懇切丁寧に教えていただいた。

15th Congress of the EAA (Budapest, Hungary)

15th Congress of the EAA は大会長 Dr. Bodzsar, E.B. (Eötvös Loránd University) のもとハンガリーの Budapest で2006年8月30日から9月3日まで開催された。筆者は会場で金澤英作先生 (日本大学) と合流した。記憶によると、他には三野 耕先生 (兵庫教育大学), 成山公一先

生 (京都文京大学), 山本和彦先生 (九州大学), 和崎春日先生 (名古屋大学) の大学院生 Ms. Fukushima Byrom Rieko さん, 片山一道先生 (京都大学) のトルコからの大学院生 Ms. Basak Koca Ozer さんらが日本関係の参加者であった。Plenary Session, Oral Session, Poster Session があり、Symposium として Human evolution, Human Population Genetics and Biodemography, Growth and Development—Dedicated to the memory of O.G. Eiben, Human Ecology, Paleoanthropolgy and Paleopathology, Applied Anthropology などがあった。Growth and Development の Symposium では、2004年末に急逝された Dr. Eiben の名前がタイトルに添えられていた。

Dr. Eiben, O.G. (Eötvös Loránd University) は1994年ハンガリーの Szombathely で7th International Congress of Auxology の大会長を務めた。その時初めて会い、2002年の13th Congress of the EAA (Zagreb) でも勿論会った。2004年の10th International Congress of Auxology (Firenze) でも会うことができた。しかしその年末に Dr. Eiben は急逝された。思い起こせば7th International Congress of Auxology では、Reg Whitehouse Prize の Jury Member を仰せつかった。十二名がメンバーであった。その時、韓国から Dr. Beunen, G. (Katholieke University Leuven) のところに留学していた大学院生 Dr. Son, J.K. がその賞を射止めた。一票を投じた者としてうれしかった。そんなこともあってか、それ以来 Dr. Eiben から別刷りが届けられた。学会終了後、Szombathely から Dr. Danker-Hopfe, H. (Bremen University) とともにドイツに向かった。その途中ウィーンで Dr. Tanner, J.M. による Tanner-Whitehouse 法のワークショップに参加した。Dr. Gilli, G. (University of Turin) に前もって連絡を取って彼女とともに参加した。Dr. Tanner は自ら X 線写真から骨年齢をコンピューターで査定する方法を説明された。その様子は日本で見るのと少し異なり、夫人である Dr. Lindgren との協力関係も微笑ましかった。その旅行中 Dr. Danker-Hopfe に EAA のことを教えていただき入会の誘いを受けた。当時彼女は EAA の会計を担当していた。前後するが、そんなことがあって1996年の Brussels での Congress of the EAA に初めて参加することになったのである。

話を15th Congress of the EAA (2006年) にもどすと、筆者は Dr. Hauspie の次ぎに発表し、Dr. Eiben に哀悼の意を捧げることができた。座長は大会長の Dr. Bodzsar と Dr. Cameron, N. (Loughborough University) であった。また、二日目の Human Ecology-Screening for Health and Disease のセッションでは、Dr. Volanski, N. (Centro de Inves-

tigacion y de Estudios Avanzados); Dr. Bennike, P. (University of Copenhagen); Dr. Schell, L.M. (University at Albany); Dr. Mascie-Taylor, N.C.G. (University of Cambridge); Dr. Cameron らが演者で、座長は Dr. Jonston, E.F. (University of Pennsylvania) と Dr. Hauspie であった。なかでも、Dr. Mascie-Taylor の A review of the anthropometric methods of screening for health and disease には、anthropometry の使い方に工夫があり、新たな魅力ある計測値の使い方を知った。このように、Congress of the EAA には Congress of Auxology の多くの常連が参加しており、そのセッションは Congress of Auxology のようであった。この Congress での発表論文を集めた冊子 Selected Papers of the 15th Congress of the EAA (Bodzsar, E.B. and Zsakai, A. eds. 2007a, b) が出版された。

13th Congress of the EAA (Zagreb, Croatia)

13th Congress of the EAA (2002 年)は 9th International Congress of Physiological Anthropology (Cambridge) の直後に開催されたので両 Congress に参加した。Cambridge では多くの生理人類学会の人々と会うことができ、さらに Dr. Norgan, N. (Loughborough University) や稲岡司先生 (佐賀大学) にも会った。筆者同様、両 Congress に参加した先生方が数名おられた。記憶によると、門司和彦先生 (長崎大学)、山本和彦先生 (九州大学)、石橋圭太先生 (九州大学)、樋口重和先生 (国立精神・神経センター) らである。Dr. Norgan とは Zagreb の Congress of the EAA でも一緒だった。その後日本に招聘された時、東大人類生態学教室 (大塚柳太郎先生) 主催のセミナーで会った。そして、Dr. Norgan と山内太郎先生 (北海道大学) とともに茨城大学の服部恒明先生を訪ねた時、Dr. Norgan は部屋に入るなり壁に貼ってある図を見て開口一番、"Hattori's Chart" といって身体組成の話題について話しはじめた。今は亡き Dr. Norgan の姿が思い出される。今年の夏 (2007 年) 東京での International Congress of Auxology の後、Society for the study of Human Biology と生理人類学会の協賛で、A joint meeting between the society for the Study of Human Biology and the Japan Society for the Study of Physiological Anthropology が Cambridge で開催された。東京の International Congress of Auxology に参加した何人かのゲスト・スピーカもそれに参加した。

筆者は、前述のように Congress of the EAA には 10, 12, 13, 15 回大会に参加した。懇親会は、立食、正餐など開催地によって異なり、海外のマナーに疎い筆者にとってはいい経験になる。そんなことから二年に一度の

Table 3 Honrary members of the European Anthropological Association

Year	Name	Country
1988	Jelinek, J.	Czeck Republic
1988	Olivier, G.	France
1990	Ferenbach, D.	France
1990	Tanner, J.M.	Great Britain
1994	Prokopec, M.	Czeck Republic
1996	Roberts, D.	Great Britain
1996	Eiben, O.G.	Hungary

Congress of the EAA を楽しみにしている。筆者の知る範囲で、Congress of the EAA に出席する日本人はいつも非常に少ない。

名誉会員

名誉会員は表 3 に示す通りである。Jelinek, J. (Czech Republic), Olivier, G. (France), Ferenbach, D. (France), Tanner, J.M. (Great Britain), Prokopec, M. (Czech Republic), Roberts, D. (Great Britain), Eiben, O.G. (Hungary) が名を連ねている。筆者が思い浮かべることのできるのは、Dr. Tanner 以降の人々である。それらの人々は Human Biology 分野の Auxology に関心を持っているからである。その中でも特に、Dr. Tanner は日本の Auxology 分野で著名で、彼の書いた「Growth at adolescence」はその分野の古典となりつつある。Dr. Robert, Dr. Prockpeck, Dr. Eiben など他の名誉会員も Auxology に関心のある人々で、Congress of the EAA は Human Biology あるいは Auxology に関心のある者にとっては楽しめる学会だと思う。AAPA と同時開催の Human Biology Association の Congress にも多くの Auxology に関心のある人々が集まるように。

最後に

子どもに関するヒトの生物学の学会はいくつかある。日本子ども学会、日本成長学会、日本発育発達学会などが思い浮かぶ。子どもを捉えるには、生物的な側面だけでなく社会文化的な側面も考慮に入れることが重要であることはいうまでもない。そんな思いから、第 59 回日本人類学会大会で、演者に教育学の今井重孝先生 (青山学院大学)、文化人類学の和崎春日先生 (名古屋大学)、健康栄養学の田中茂穂先生 (国立健康栄養研究所) を招きシンポジウム「子どもの発育と身体活動」を行った。ここでも問題になったのは遺伝と環境の問題である。環境要因をブラックボックスのように考えることが多く、今

後環境要因を一つずつ明らかにしていくことが必須であると再確認した。今年の 11th International Congress of Auxology での, Dr. Lample, M. (Emory University) の “Life style, growth, health: recognizing the translational biological processes” の講演は聞き応えがあった。15th Congress of the EAA での Dr. Mascie-Tyler の報告も同様, これらは Auxology の今後の研究の展開方向を示す報告であったように思う。そういった意味で, Dr. Komlos, J. (University of Munich) の Economics and Human Biology が今後どう発展するのか興味惹かれる。いずれにせよ, 楽しい活発な学会には多くの人が集まるのだろう。

最後に, EAA といえば先ず Dr. Danker-Hopfe との交友が思い出される。次回の Congress of the EAA は, 2008 年デンマークの Odense で Dr. Boldsen, J.L. (The University of Southern Denmark) のもとで開催される。

謝 辞

I am grateful to Prof. Dr. R. Hauspie (Free University Brussels) and Prof. Dr. A. Zsakai (Eötvös Loránd University) for giving me a information about the EAA, and Prof. Dr. H. Danker-Hopfe (University of Bremen, University of Berlin) for recommended me to join the EAA membership and also to attend Congress of the EAA, and for her long term friendship.

参考文献

- Bodzsar, E.B. and Zsakai, A. eds. (2007a) Human Diversity and Biocultural Researches. Selected papers of the 15th Congress of the European Anthropological Association, Human biologia Budapestensis, 30.
- Bodzsar, E.B. and Zsakai, A. eds. (2007b) Growth and Ageing: Facts and Factors. Selected Papers of the 15th Congress of the European Anthropological Association, Human biologia Budapestensis, 31.
- Bodzsar, E.B. and Susanne, C. eds. (2006) Human Evolution: Facts and Factors. Biennial Books of EAA, Vol. 4.
- Eötvös Loránd University (2006) 15th Congress of the European Anthropological Association. Man and Environment: Trends and Challenges in Anthropology.
- 佐竹隆 (2005) フィレンツェ紀行. 美術解剖学雑誌, 9: 33–36.
- 佐竹隆 (2005) 発育学の課題 (2). 日本大学松戸歯学部教育・研究紀要, 7: 22–27.
- 佐竹隆 (2004) 特集 家庭と子ども. 子どもと発育発達, 2: 巻頭言.
- 佐竹隆 (1997) Prof. Kemper (Vrije Universiteit Amsterdam) と The Amsterdam Growth Study. 体育の科学, 47: 221–224.
- 佐竹隆 (1996) 海外共同研究についての一考察. 日本大学松戸歯学部一般教育紀要, 22: 155–160.
- Tanner J.M. and Lindgren G.W. (1994) The computer-assisted assessment of TW2 Skeletal Age (CASAS). International Satellite Workshop on Bone Age Assessment and Prediction of Adult Height.